

研究論文

上昇調の名詞一語文における中国語と日本語の意味の違い

楊 曉 安

The Semantic Differences Between Chinese and
Japanese Rising-tone Noun Holophrases

YANG Xiaolan

0. はじめに

ある名詞性の単独句を用いて上がり調子で話すとき、話の前後の文脈およびそのときの具体的な話される状況によって様々な解釈ができる。これはすべての言語に共通する現象であり、中国語と日本語もまた例外ではない。けれども私達が注意しなければならないことに、基本的に同じ語句の形式であっても、その言葉の意味があらわす範囲は、言語が違えば必ず差異があるかもしれないことであり、この点において名詞単独の文はわりあい違いがはっきりしている。

本章でいうところの「一語文」とは、厳密な意味ではとりあえず名詞一つだけからなる文を指しており、中国語ならば名詞の後につく助詞の“的”“吧”“啊”，日本語でなら名詞の後に付ける“は”“で”“から”など、付属語が付くようなものは検討の範囲外とする。

ある名詞に何か付け加えて語調を整えることで、文の構成単位であったものからコミュニケーションの単位へと昇格したもの——それが単文である。およそ単文は特定の語気を備えているものであり、それが平叙文であったり、あるいは命令、疑問、感嘆であったりする。語調の表現形式は多くの音声特性の共同作用から成り、中でも周波数の高さ、振幅の大きさ、音を伸ばしている時間などが等しく語気に関係しているが、最も重要な要素はやはり音の高さである。音声の高さの過程が異なる曲線グラフを描き、言語における語気的主要な区別をつくる。世界中の言語にはほぼ一致する特徴が一つあって、それは即ちある言語単位の終りの周波数を上げ、音声を上がり調子にすることで疑問を表現することである。疑問語気の方法には語調、文末語気詞、語気副詞、疑問代詞など数種類の形式があるが、なんと疑問語気の構成では語調がいちばん重要かつ基本的な方法なのである。

命令文の急速に下降する語調や、平叙文のゆったりと平板な語調と異なり、疑問語気は普通上がり調子に表現され、この語調の上昇は音声の周波数が上がることによって実現されるものである。

発音から見ると、日本語の名詞には音の重さとリズムにタイプがあり、それには平板型(例“たばこ”)、尻高型(例“花”)、頭高型(例“みかん”)、中高型(例“たまご”)の四種も含まれる。中でも“頭高型”と“中高型”のことがばが直接疑問文になるとき、語気の形式上、文全体が上がり調子の曲線をとることは難しい。中国語では各音節ごとに決まった声調があり、これも疑問文全体が頭から尻まで直線的に上昇する可能性を排除している。本章で考察する上昇調の名詞単独語文ではただ文末のみを重視しており、文末にみられる上昇動向だけを取り上げ、その言葉がどの型であるかにかかわらず、同様の扱いをするものとする。

1. 主題のあいまい性

どんな名詞単独語文であっても上昇調で話されれば、さまざまな質問の意味をあらわすことになる。たとえば、

(1) たばこ？

(2) 烟？

この単独語文の意味として、様々な解釈がある。以下(3)はその一部に過ぎない。

(3) a. 答えはたばこ？

b. さがしものはたばこ？

c. 買いたい物はたばこ？

d. 火災の原因はたばこ？

もちろん、状況が違えばまだまだ多くの解釈ができる。もしもこれらいくつかの解釈を少し注意して分析・比較してみるとすると、ある何らかのはっきりしない話題をめぐって「それは煙草？」という問いかけがあり、それら解釈はす

べてその話題にあることに気がつくだろう。すなわち、例(1)は異なる場面で多種多様な意味があるけれど、結局つまるところ「○○はたばこ？」の問いかけに帰納することができるということだ。この“○○”の所にははっきりしない話題の部分が入り、この話題の部分は情況に基づいて様々な補充と解釈が可能である。これがつまり松本恵美子氏言うところの“話題のあいまい性”というものであり、例(1)のさす意味が多様であることの最も大きな原因である。

これに対して、中国語の例(2)では、例(1)のようないろいろな解釈に加えて更にほかの解釈もできる。以下(2)に関する解釈の一部分である。

(4) a. 你的回答是烟吗？

=(3a) 「あなたの答えはたばこ？」

b. 你找的东西是烟吗？

=(3b) 「あなたが探しているものはたばこ？」

c. 你想买的東西是烟吗？

=(3c) 「あなたが買いたい物はたばこ？」

d. 火灾的原因是烟吗？

=(3d) 「火災の原因はたばこ？」

e. 烟怎么样？(抽一支好吗？)

「たばこはいかがですか？(一本いいですか?)」

(4)a～dと(3)a～dは同じで、“話題+説明”の構造である。けれど(4)e「烟怎么样(抽一支好吗)? [たばこはいかがですか(一本いいですか)?]」は“話題+説明”構造に属さない。このことは、中国語の名詞単独語による疑問文は日本語の場合とは違うということを表して、非“話題+説明”構造も成り立つことをしめす。

2. 話す行為のあいまい性

松本恵美子氏が英語と日本語の比較研究にて

かつて述べていることに、英語は日本語には無い特徴を具えており、松本氏はそれを「話す行為のあいまい性」と称している。¹この点において、中国語も同様である。話す行為のあいまい性は、(4)eのような勧誘の意味の文には少しも現れないが、何か依頼するときには現れがちである。例(5)を御覧あれ。

- (5) a. コンピューター？
b. 电脑？

(5)a,bは文法レベルからは何の問題も無いが、私たちにとってはこの文は「ちょっとコンピューターを使ってもいいですか？」のような、依頼の意味で思っているときに現れやすい表現であって、日本人はふつう(5)aのようなことを言わないだろう。もしも無理にこのような形で依頼すると、少なくとも日本語ではきわめて不自然な言い方となる。つうじょう日本人は一語にて「コンピューターを使っていますか？」という依頼の意味を言うとき、名詞句の「コンピューター？」とは言わず、動詞句や形容詞句を使って「あいてる？」(没人用吧?)「いい？」(可以吗?)などの言い方をするのがいちばん自然である。この理由について、日本語の単独語文は動詞・形容詞句が主であり、ふつう名詞の形で要求を表さないからだ、という人もいる。たとえこの説が正しいとしても、どうして(5)bが(5)aよりも意味がとて多いか私たちには理解しがたい。なぜなら中国語の単独語文でも同じように動詞・形容詞が絶対多数を占めるからだ。あきらかに、「話題のあいまい性」と「話す行為のあいまい性」とは本質的に異なるものである。

私たちはさらにいくつか中国語の例を挙げることができる。(6)を御覧ください。

- (6) a. 钥匙？(鍵はどこですか？鍵を持ちましたか？ドアをあけましょう。等)
b. 电梯？(エレベーターはどこですか？エレベーターに乗りましょう。等)

- c. 衬衣？(私のシャツはどこ？シャツを買ったらどうですか？等)
d. 音乐？(音楽をかけましょうか？どうして音楽をかけないの？等)
e. 汽车？(車で行くの？ どうして？車はどこ？等)

以上例文の括弧内の解釈は実際ほんの一部分に過ぎず、コミュニケーションの状況が違えばまだまだ多くの意味解釈ができる。(6)の単独語文をもしも日本語で言ったなら、カッコ内の意味はあまねく存在せず、ただ前述の「○○は～？」という意味の質問になる。それではどのようにして、この中国語と日本語のちがいを解釈したらよいのか？

3. このような言い方に対する意味解釈

松本恵美子氏(1997)は、日本語は“話題+説明型”言語に属し、助詞「は」は話題の後に付けて話題と説明部分をはっきり分け、話題を強調させる働きがあると言う。助詞によって話題と説明部分をわけて、話題を強調する言い方は中国語にもごく普通にあることなので、これはとても理解しやすい。たとえば“明天我们去韩国。”(私たちは明日韓国に行く。)は普通の文型だが、“明天啊，我们去韩国”(明日、私たちは韓国に行く。)は話題型であり、この“明天(明日)”が「啊」によって話題として強調されている。

注意して日本語の名詞単独語疑問文に比較すると、形式上隠されている二つの構造、すなわち「A(+か)？」と、もうひとつ「A+は？」というものを簡単に見出すことができる。この二つの形式が一緒になって、日本語の上昇調名詞単独語文のしっかりした構造を作り出している。「Aは？」という言い方で話すとき、すでに話題の部分は提示されている。実際に「Aは(○○)？」と問うのに「A(か)？」

という言い方をするとき、すでに説明の部分は提示されているが話題は隠されており、意味は「(〇〇は) Aか?」という問いかけである。これに対して中国語では日本語のように話題と説明の部分がきっちり分かれなないし、また話題を示す指標(記号)が無いので、ただ“A?”という形式で日本語の「A(か)?」「Aは?」の両方の意味を表現できるのである。

たとえば、例(2)の中国語の“烟?”とは、“〇〇

是烟吗?”(日本語の、Aか型)でもあるし、“烟〇〇呢?”(日本語では、Aは型)でもある。しかし例(3)の「たばこ?’はAか型に属するので“〇〇是烟吗?”の意味しか表せない。もしも“烟〇〇呢?”の意味を表したければ必ずAは型を使って「たばこは?」とする。つぎに例(1)(2)をもとに例文を挙げ、中国語と日本語の名詞単独語文が昇調であるときの意味関係をまとめたい。

	句子形式	语义解释	句子形式	
汉语	烟?	这是烟吗? 找的东西是烟吗? 你想要的东西是烟吗? 他送给你的东西是烟吗? 他坐立不安的原因是烟吗? 夫妻吵架的原因是烟吗?	たばこ?	日语
		烟怎么样? 烟来一支怎么样? 烟放在哪儿了? 烟买回来了吗? 烟可以抽吗?	たばこは?	

じつのところ中国語文法の特徴の一つに、助詞を使って違う文法意味を表現するというものがあるので、とうぜん文末に違う語気詞がくれば違う意味内容が表される。ここで論じている名詞単独語文について具体的に言うならば、日本語の「Aか型」および「Aは型」は、中国語にそれぞれ相応じた語気詞の形式がある。すなわち、「Aか型」は“A吗?”に、「Aは型」は“A呢?”に等しい。例として、

- (7) a1. かぎか?
これは鍵ですか?
探しのは鍵ですか? など
- a2. かぎは?
鍵はどこですか?
鍵でドアを開けなさい。など
- b1. 钥匙吗?
这是钥匙吗?
你找的是钥匙吗? 等

- b2. 钥匙呢?
钥匙在哪儿?
用钥匙开门呀。等
- (8) a1. 地下鉄か?
あれは地下鉄か?
乗ったのは地下鉄か? など
- a2. 地下鉄は?
地下鉄はどこ?
地下鉄で行くのはどう?
- b1. 地铁吗?
那这是地铁吗?
刚才坐的是地铁吗? 等
- b2. 地铁呢?
地铁在哪儿?
坐地铁去怎么样? 等
- (9) a1. エレベーターか?
これはエレベーターか?
言うのはエレベーターか? など

- a2. エレベーターは？
エレベーターはどこ？
エレベーターはどう？など
- b1. 电梯吗？
那这是电梯吗？
你说的是电梯吗？等
- b2. 电梯呢？
电梯在哪儿？
坐电梯怎么样？等
- (10) a1. バレーボールか？
これはバレーボールか？
今日の試合はバレーボールか？など
- a2. バレーボールは？
バレーボールはどこ？
バレーボールをするのはいかが？など
- b1. 排球吗？
那这是排球吗？
今天的比赛是排球吗？等
- b2. 排球呢？
排球在哪儿？
打排球怎么样？等

以上より、a1「～か？」=b1「～吗？」、a2「～は？」=b2「～呢？」である。一見すると、日本語の文末助詞「か、は」と中国語の文末語気詞“吗、呢”は対応しており同等のようである。けれども、もしもう少し詳しく見るとそれらは実は同じではない。下の公式を御覧ください。

日本語：

$Xか=X$ $Xは\neq X \Rightarrow X=Xか$

中国語：

$Y吗=Y$ $Y呢=Y \Rightarrow Y=Y吗or Y呢$

以上から、このような名詞の上昇調一語文において、日本語名詞“X”に何も付かない時はただ是非(～かどうか)を問うているのであり、それゆえ指標が必要なのであるが、それに対して中国語名詞“Y”に何も付かない時は是非文でもあり且つ特定のものを指す問いでもあり、そ

の他にも疑問や使役・勧誘なども当然表すので、指標を持たないことがわかる。

中国語で、名詞ひとつだけを上がり調子で発音した単文は豊富な文法意味内容を表すようになる。このことは、孤立語に属する中国語は(ひとつの単語が)多くの意味を持ち、形式は軽く、意味合いを重んじ、構造的な文法が簡単であるという性質の格好の証明である。これは、膠着語が具える厳密な文法形式と意味対応形式をもつ日本語とはまったく異なる。

4. 語音実験

もちろん、中国語文法は多重の意味を持ち、形式を軽んじ、意味合いを重んじ、構造を軽んじ、確かにこれが上昇調の名詞一語文における中国語と日本語での意味のちがいの大きな原因になっている。けれど、私たちはもう一歩すすめて、中国語における上昇調でひとつだけの名詞からなる一語文が、“～吗？”と～呢？”という異なる意味を表すとき、その発音(音質)はまったく違うのか否かを考えなければならぬ。私達が調べて分かったことからすると、ある程度の違いがあるようである。もし違いがあるとすれば、どこにあるのか？この問題をはっきりさせるために、以下のような音声実験を行った。

(1) 実験の手順

まず、私たちは“钥匙、电梯、地铁、出租车、排球、电脑”の6つの名詞を3つの一語文(2つの疑問文と1つの平叙文)にした。たとえば、
文1：钥匙？(意味：これは鍵ですか？)
文2：钥匙？(意味：鍵はあなたのところで、ドアを開けてください。)

文3：钥匙。(意味：これは鍵です。)

ほかの5つの名詞も上のような三つの文にする。

それから、私たちは三人の話者にそれぞれ違う意味で発音してもらって、その記録を音声データにした。

続いて、私たちはその音声データを音声分析ソフトによって解析し、ちがいを探し出した。

最後に、私たちは選び出した代表的な音声材料を持って10人に聞いてもらい、意味を聞き分けてもらった。

(2)音声材料のデータ分析

以下はそのうち一名の話者の音声材料の波形図と周波数、振幅、時間のデータである。波形図形は左から右へ順に文1(是非疑問)、文2(特定するための疑問)、文3(平叙文)である。

“**①** 钥匙”の”匙”は轻声なので、疑問文での発音は前の一音節 “**①** 钥”の音をさらに高く言うことで表現されるため、“**①** 钥”の最高点をF0値にとり、その他のことばの周波数は後ろ一音

節の最終点をF0値にした。振幅数は各文の最大値をとった。時間長は各文全体の長さとした。

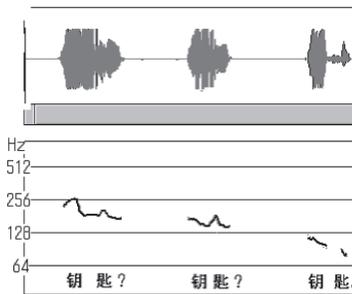
以上6つの名詞文のデータがあらわすことに、中国語の文1と文2は振幅においては殆ど区別が無いが、周波数と時間長からは明らかな差異が認められる。

まず周波数から見ると、文1(是非疑問)の周波数は文2(特定疑問)に比べて高い。そのなかで最も差が大きかったのが“**⑤** 排球”で、文1の終点F0値は文2の終点値の二倍余りあり、差が最も小さかったのは“**⑥** 电脑”で、文1は文2よりも12%高かった。

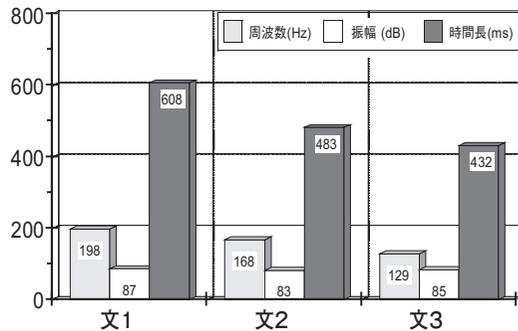
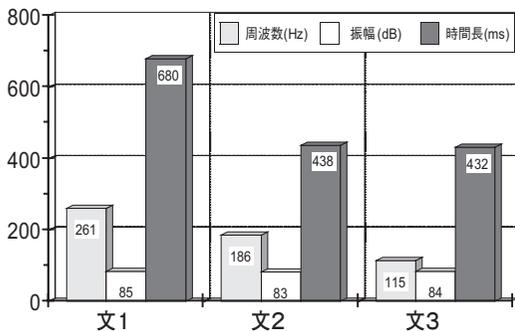
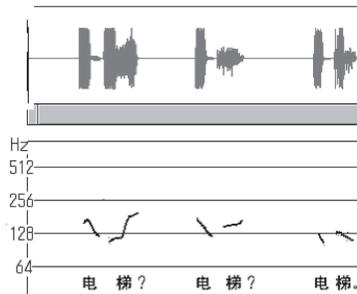
次に音声の長さから見ると、文1は他の二文より長い。そのなかでいちばん差が大きいのは“**①** 钥匙”で文1は文2に比べ55%長く、差が小さいのは“**④** 出租车”で文1が文2より16%長い。

三人の話者の音声材料は2組を除けば、他の

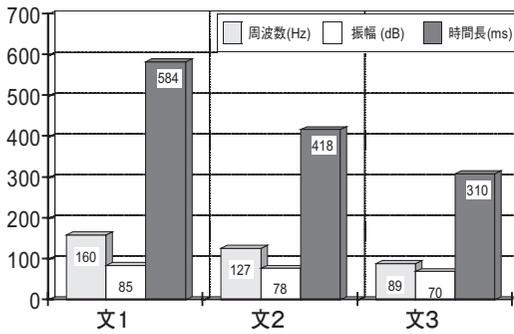
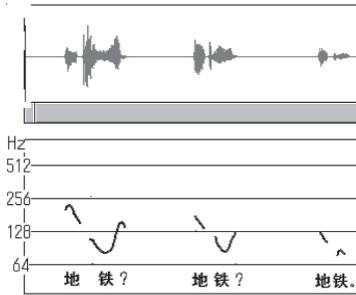
① 钥匙



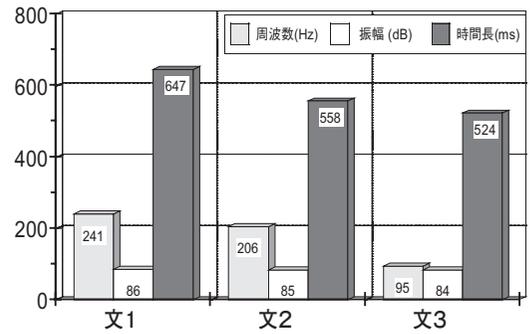
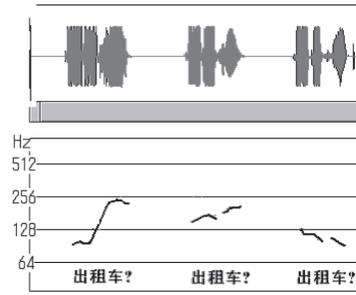
② 电梯



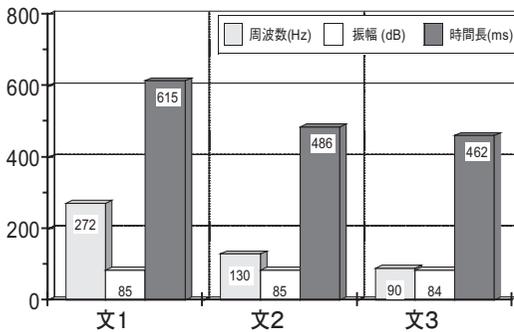
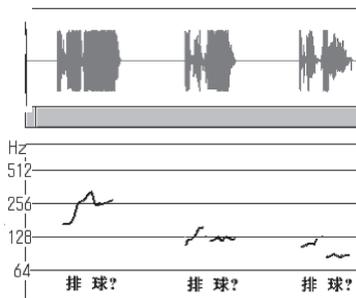
③ 地铁



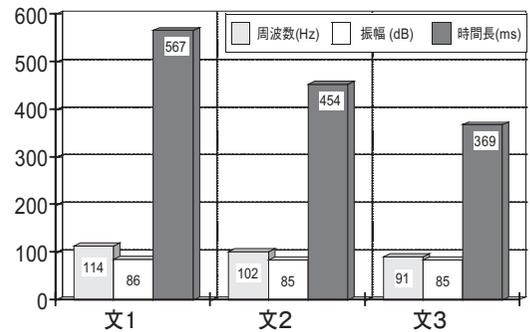
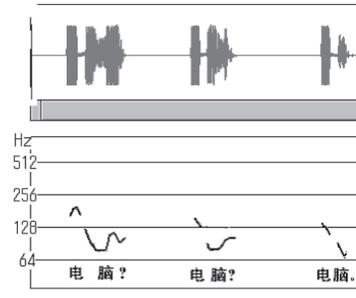
④ 出租车



⑤ 排球



⑥ 电脑



16組の音声材料ではF0値と時間長の比にいくらかの違いがあったが、文1のF0値は文2よりも高く、文1と文2は時間長が完全に一致した。これは、名詞一語疑問文が“～吗?”と“～呢?”とすることを表現するとき、まったく違う音程をしめすことを説明している。

いったいこのような規則性があるのかどうか、私たちはさらに聞き分けを持って検証してみる必要があった。

5. 聞き分け検証

検証を持って結論とするために、私たちは6組の音声材料から文1と文2を切り離し、聞き分け用の12個の音声材料を作った。それぞれの素材を繰り返し10回順不同に10人に聞かせ、文の意味が“～吗?”または“～呢?”どちらなのか強制的に選ばせた。以下はその聞き分けの結果である。

音声材料		聞き分け率	音声材料		聞き分け率
① 钥匙?	～吗?	99%	④ 出租车?	～吗?	94%
	～呢?	90%		～呢?	87%
② 电梯?	～吗?	97%	⑤ 排球?	～吗?	98%
	～呢?	93%		～呢?	83%
③ 地铁?	～吗?	98%	⑥ 电脑?	～吗?	99%
	～呢?	89%		～呢?	87%

以上の聞き分けデータは少なくとも次の2点を説明している。

i. 中国語の名詞単独語疑問文が“～吗?”と“～呢?”の意味を表現しているとき、音声形態にはっきりした区別がある。周波数の高さと総時間の変化によって、異なる意味内容を表すことができる。

ii. たとえ実際のコミュニケーションの場面であっても、中国語の名詞単独語疑問文が“～吗?”と“～呢?”をあらわすときに、やはり重要かそうでないかの区別がある。すなわち是非疑問の意味が重要であり、特定疑問などその他の意味はそれほどでもないということだ。この種の聞き分け傾向は、以上6組の言語素材で“～吗?”の聞き分け率が“～呢?”よりも高かったということをもって実証・解釈することができる。

6. 結論

中国語と日本語では、上昇調の名詞単独語文

が意味するものの範囲の広さに明らかな違いがある。両者の上昇調名詞単独語文がおしなべて、“○○は～か?”を省略した“○○”が話題となること以外に、中国語の単独語文は、日本語では表現できない“～は○○か?”の省略形の発話行為の分まで意味することができる。その原因の考えるに、日本語の上昇調一語文において名詞のみの形の時は指標がともなわなければならない、そうでなければ単に是非を問うだけのものである。けれど、中国語の上昇調単独語文にて名詞のみの時には指標がいらないので、比較的広い意味を示し、単に是非を問うだけでなく、何かを特定した言い方もでき、かつ命令・勧誘などその他多くの意味内容も表すことができる。けれどこれらは日本語なら接助詞“は”を付けないと表現できない。

中国語の上昇調の名詞一語文と日本語とで表現する意味範囲の広さが違う主な原因は、両者の言語タイプのちがいにある。日本語は膠着語に属し、文法意味はことばの後ろにつく助詞の形態にて表現され、形式と意味が一つ一つ対応す

る。だから表現がわりあい固定している。孤立語としての中国語特徴は、何か要素を付け加えるという語法形式ではなく、文法構造はとても弾力性に富み、意味が多く、形式は軽く、意味合いを重んじ、構造が軽い。だから一つの形式でありながら、情況が違えばいろいろな解釈がある。これが中国語の特徴であり、上昇調の名詞一語文が表現する範囲が日本語よりも広いことの当然の理由である。

中国語での上昇調の名詞単独語文は“～吗？”と“～呢？”という二つの意味内容を表現できるが、細かい区別を加えると、二つの意味は音声形態上やはり細かい違いがある。“～吗？”という意味の名詞では終点のF0値は“～呢？”の意味の時に比べて明らかに高い。このほかに時間長にも明らかな差異があり、前者は後者に比べて長くなりがちである。この二点より、中国語の二つの意味には音声上の違いがあるといえる。

そのほかに私たちは聞き分け実験の検証を通じて、中国語の上昇調名詞一語文には“～吗？”と“～呢？”の両方の意味があって、音声にあるはっきりしたちがいがあがあるのだが、ひとびとはこれらの文を理解するとき、やはり“～吗？”を“～呢？”よりも明らかに重視して区別をつけている。

注

- 1 松本恵美子氏（1999）「上昇調イントネーションの拡張可能性と多義性」を参照。

参考文献

- 馮勝利（1997）《漢語的韻律，詞法与句法》，北京大学出版社。
- 賀陽（1992）試論漢語書面語的語気系統，中国人民大学学報1992年第5期。

勁松（1992）北京話的語气和語調，《中国語文》1992年第2期。

葉軍（2001）《漢語語句韻律的語法功能》，華東師範大学出版社。

前川喜久雄（1997）「日本語疑問詞疑問文のイントネーション」，《文法と音声》，くろしお出版社。

松本恵美子氏（1999）「上昇調イントネーションの拡張可能性と多義性」，《文法と音声Ⅱ》，くろしお出版。

森山卓郎（1997）「一語文と文末イントネーション」，《文法と音声》，くろしお出版社。

小山哲春（1997）「文末詞と文末イントネーション」，《文法と音声》，くろしお出版社。

レイ・D・ケント／チャールズ・リード著，荒井隆行／菅原勉監訳（1996）『音声の音響分析』，KAIBUNDO。

片桐恭弘（1997）「終助詞とイントネーション」，《文法と音声》，音声文法研究会。

市崎一章（2001）「英語の曖昧文におけるイントネーションパターンと核」，《音声研究》第5巻第2号。

Abstract

The noun holophrase with rising-tone has remarkably different semantic extensions in Chinese and Japanese. In both languages, such holophrases can express the meaning of the sentence “Is ○○ ~ ?” by omitting the theme “○ ○”. However, the Chinese holophrases, just as English ones, can also denote the meaning of “what does ~ ○○?” by omitting the action part, while Japanese ones can not. The reason can be traced to the fact that in Japanese holophrases, the zero-form of a noun belongs to a marked category, which can only point to general questions, while in Chinese, it falls in the scope of an unmarked category, which has a much wider semantic extensions pointing not only to general questions, but also to special questions and also imperative, persuasive significations etc. These can only be achieved in Japanese by using the auxiliary word “wa”.

This paper points out that it is the disparity in language types that leads to the different notional horizons between Chinese and Japanese rising-tone noun holophrases. Japanese is an inflected language in which the grammatical meaning is indicated by the morpheme adhered to the end of the word. Because the form and meaning are of a one-to-one relationship, the significance is relatively stable. As an isolating language, Chinese has a flexible syntactic structure, emphasizing meaning and parataxis rather than form and structure. A prominent feature of the Chinese language is that one form can be interpreted differently in various contexts. Such a feature decides that a Chinese rising-tone noun holophrase has a wider notional horizon than a Japanese one.